FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

1996.11.30 No.30

福井県立博物館

復元夢楽洞絵馬「大織冠（海士）図」（裏面参照）

研究ノート

「北前船」という言葉について

山形　裕之

今日、「北前船」は広く市民に知られている。この言葉が普及しはじめたのは、昭和50年代後半からのことである。それは、どのようないきさつによるものだろうか。その大きな要因として、博物館や資料館の展示テーマにとりあげられるようになったことが考えられる。当館を含めて、多くの館が常設展示に「北前船」のコーナーを設け、これをテーマにした企画展も開催されてきた。最近では、「北前船」と称して、弁才船の縮少模型を展示する館もある。さらに、「北前船」のテーマ館が、北陸地方を中心に各地で開設された。その代表といえるのが、昭和58年に開館した石川県加賀市の「北前船の里資料館」である。同館は、同地の旧船主宅の保存と公開を目的に、関連資料の展示を行い、開館当時はたいへん注目された。このほか、富山県東岩瀬の「北前船廻船問屋 森家」、石川県門前町の「天領北前船資料館」、福井県河野村の「北前船主の館 右近家」などがあり、現在計画中の館も含めるとかなりの数になる。これらは、近年さかんな「村おこし・町おこし」事業の一環として開設されたものが多い。地元をアピールするキャッチワードとして、「北前船」が活用されたのである。

また、各地でセミナーやシンポジウムの開催があいついだことが考えられる。加賀市の「北前船セミナー」や河野村の「西廻り航路フォーラム」では、海運史研究者だけに限定せず一般市民も参加できる形で行われ、「北前船」に対する関心が広がっていった。このほか、昭和61年の「北前船」と称した高田屋嘉兵衛の「辰悦丸」復元船の日本海航行、昭和63年以降毎年行われている福井県の「北前船航路体験学習」などの各種イベントが数多く行われてきた。それらはマスコミにとりあげられ、「北前船」の語はますます多くの人びとの目に止まることとなった。

さらに、最近では「北前船」が、土産物の商品名や歌謡曲・レジャー施設の催事物にまで使われるありさまである。

○

ところが、現在わかるかぎり、この「北前船」という言葉は、歴史史料の中では、わずか３か所でしか使われていないのである。

その一つは、大坂の船大工金澤兼光が宝暦11年(1761)に著した『和漢船用集』である(明和3年(1766)刊)。同書は、日本と中国の船に関する事柄をまとめた船の百科事典といえるもので、全12巻からなる。そのうちの3～7巻では、海船・川船・御座船・江湖船・猟船・軍船などに分類して、それぞれの船の構造や船名の由来が説明されている。その第4巻目の「海舶之部」に属する計98の船名の一つに「北国舟」があり、その解説の中に「北前舟」の語が登場する。全文は、「北国舟　加賀能登越後南部等の舟也、是を北前舟 北国舟と云、俗呼てトンクリ舟と云は其形の似たるを以ていうなるべし、是をオモキ造りと云、凡千石以上の大船也、舟の制はハカセと少し異也」とある。これによれば、「北国舟」は加賀・能登・越後・南部地方等の船で「北前舟」ともいわれる、というのである。

この記述に関連して、造船史研究の石井謙治氏は、「北国船」は「北国船」という北国地方特有の船型をさす船型呼称で、「北前船」は上方方面での「北国地方の船」の汎称である、と述べている。その根拠の一つは、「北国船」が他の多くの史料で、船型呼称である羽賀瀬船や弁才船などと並記されており、船型呼称として多く用いられていることである。このことは、越前三国新保浦の船名を書き上げた享保2年(1717)の史料でも確かめられる。

もう一つの根拠は、後に「北前船」が弁才船という船型呼称として用いられるようになったと推測されることである。時期は下がるが、明治35年(1902)に逓信省管船局が発行した『大和形船製造寸法書』に、「北前船」が特徴的な「弁才船」をさす船型呼称として用いられている。つまり、上方方面に来航する北国地方の船が「北国船」を主流とした時期には、「北国船」を「北前船」と呼び、後に「北国船」が衰退し「弁才船」を主流にするようになると、これをまた「北前船」と呼ぶようになったと解釈できるのである。「北国船」と「弁才船」とは全く異なる船型であり、「北前船」が双方に用いられた呼称であれば、これが時代

を通して特定の船型を意味するような用語でなかったことは明らかである。

○

次に、天保13年（1842）に大坂の河内屋喜兵衛から出版された『改正 日本船路細見記』に「北前船」の語がみられる。同書は、各航路別に湊名と出入津の際の注意事項や簡略な航路図・船磁石の用法など、航海上必要な諸知識をコンパクトにまとめたもので、当時の船乗りにもっとも普及した航海書といわれる。この冒頭部分に、「諸国之船大坂着場所」という項目があり、計36の船ごとの着船場所が記されている。船名の一覧を示すと、下記のようになる。

1尼ケ崎船	13伊予 大洲船	25尾張船
2兵庫船	14伊予 宇和嶋船	26泉州船
3播州 飾万津船	15伊予 松山船	27諸国塩船
4明石船	16土佐船	28諸国魚船
5備前 岡山船	17安芸 広島船	29江戸廻船
6備中 玉嶋船	18筑前船	30菱垣船樽船
7備後 鞆船	19小倉船	31北廻地船
8福山尾道船	20下関船	32金毘羅参詣船
9阿波船	21肥後船	33上荷船
10淡路船	22薩摩船	34茶船
11讃岐 高松船	23日向船	35新三十石船
12讃岐 丸亀船	24北国路北前船	36貸御座船

これをみると、1～26までは地域名称を冠した船名称になっており、それぞれの地域から来る船を船籍ごと記載したものである。また、27・28・29は船籍地が不明であるが、30以下は、これまでの研究によれば大坂船籍の船といえる。つまり、ここに記載された船は、おおよそ大坂船籍の船とそれ以外に大別されているのである。「北前船」と同様に日本海域を航行した「北廻り地船」が、「北国路北前船」と別に記載しているのも、船籍によって区別したからであろう。このようにみると、「北前船」は北国地方船籍の船となり、先の『和漢船用集』と同様に、「北前船」は「北国地方の船」という意味で用いられていることになる。

○

ここで、「北前船」の「北前」という言葉についてみてみよう。これに関しては、これまでにいくつかの研究があり、「北前」は、瀬戸内・上方方面からみて、北の方、つまり日本海沿岸域をさすもので、同地方でよく用いられた言葉であったといえそうだ。となれば、「北前船」は日本海地域の船と解釈するのが最も自然であり、この言葉も瀬戸内・上方方面で用いられたものであるといえよう。「北前船」の語が確認できる2点の史料がいずれも大坂で出版されていることも、それを物語っている。

一方、北陸地方では、日本海を航行した廻船を「ベンザイ」「ベザイ船」「バイセン」「渡海船」などと呼んでいた。それらを「北前船」と呼んだり、自らを「北前船」と名乗った形跡はみあたらない。それは、「北前船」が瀬戸内・上方方面で用いられた言葉であり、しかも、その地域でしか意味をもたないものであったことを意味しているのであろう。ちなみに、石井氏は、日本海方面で自ら「北前船」と名乗らなかったのは、上方方面に来航する当初の日本海方面の船が旧式の北国船や羽賀瀬船が多かったので、「北前船」に田舎船という意味がこめられていたからではないかと推測している。

○

史料では「北国地方の船」という意味でしか用いられていない「北前船」を、新たに定義する試みが海運史研究において行われてきた。現在も、船主所在地・使用された船型・経営形態など、その規定すべき範疇をめぐって論議が進められている。そこでは、おもに船主所在地や船型が論点となってきたが、経営形態はほぼ共通して「買積み経営を主体とする」と規定されてきた。そのため、一般に「北前船」といえば「買積み船」と理解されがちである。最近の新聞に「北前船、運賃積みも」との大見出しで石川県加賀市の旧船主の経営史料を紹介した記事は、それを端的に示すものであろう。北国地方の船主の中に、買積み経営で莫大な利益を得て繁栄したものが少なくないことは事実である。しかし、そのことがあまりにも強調されてきたようだ。「北前船」が過大に評価されて、それに対するイメージも随分と広がっていった。そして、かつての繁栄を誇るかのように「北前船」が地域おこしのキャッチワードとして利用され、なかには、史実を無視したような使われ方も見受けられるようになったのである。

こうした現状をみると、これまでの「北前船」研究に問題がなかったとは言い切れない。そうした意味で、今一度「北前船」の歴史的な用法を再確認し、その原点に立ち戻ることが必要ではないだろうか。

資料紹介

墨書土器

仁科　章

博物館常設展示の「古代の村と農民」のコーナーに、墨で文字の書かれた土器（墨書土器）が展示されています。1000年以上も前に書かれた文字が今でも鮮明に読みとれ、観覧者の間からしばしば驚嘆の声が上がります。今回はこの墨書土器を紹介します。

この資料は、昭和49～50年にかけて北陸自動車道の建設に先立ち実施された、上莇生田遺跡の発掘調査によって出土しました。

遺跡は福井市街の南東約6㎞、上莇生田と上河北の集落の間の水田の地下に眠っていました。ここは、かつての足羽川が形成した沖積平野にあたります。

発掘された遺構は、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の大溝、奈良から平安時代の建物跡、井戸跡などでした。ここは、人びとが長い間暮らし続けた集落跡と考えられています。

この遺跡の中央を、かつて川（幅約40m）が蛇行して流れていたようで、その肩口から大量の土器（須恵器）がかたまって出土しました。まるで川の中にまとめて捨てられたかのようでした。そのなかに墨書のあるものが多く含まれていたのです。

墨書土器は、総個体数にして96点、そのうち文字として判読が可能なものが73点、文字であろうと考えられるものが23点でした。この数は、遺跡から出土した同時代の土器の1割強にあたります。

墨書土器をその形から分けると、坏45点、皿34点、蓋11点、鉢1点、壷1点、不明4点となります。すべて食膳具として使われるものです。墨書のある位置は、圧倒的に底部の外面が多く、蓋は内外面の両方に書かれており、側面や鉢の肩部に書かれるものはごく少数です。

墨書土器と他の土器を比較しても、墨書土器が特に入念に作られていたり、胎土が精良であったりということはなく、差異は見られません。

さて、墨書の文字ですが、鮮明で判読できるものとして、「長」「大長」「田中」「廣君」「道麻呂」「秦」「乙女」「東」「葡田」「儀」「寺内」「人長」があります。また、比較的字の鮮明なものに、「告」「大」「麻呂」「荒田」「足女」などがあります。その内容は、地名や人名、施設名、方位、身分、吉祥句と思われるものなどさまざまです。

以下、そのなかの代表的なものを紹介します。

・「道麻呂」
蓋の天井部に書かれており、明らかに人名と考えられます。このほかに4点あります。

・「長」
皿の底部に書かれ、チョウまたはオサと読むのでしょうか。郷里制の里長、あるいは郷長の意味とも考えられます。14点出土しており、筆体は柔らかいものと硬いものとがあり、使用した筆の違いと思われます。

・「乙女」
坏の底部に書かれ、イツメまたはオトメと読むのでしょうか。3点出土していますが、3点とも他の墨書土器とくらべて胎土、焼成が悪く、色調も茶褐色を呈し異質な感じがします。

・「田中」

墨書土器「道麻呂」

皿の底部に書かれ、人名とも地名とも考えられます。6点あります。

・「秦」
壷の底部外面に書かれ、ハタと読むと考えられ、秦氏に関係するものでしょうか。

・「東」
坏の底部外面に書かれ、方角を意味するものと思われます。

・「儀」
皿の底部外面に書かれ、ギと読むのでしょうか。何かの行事の時に使われる器とも考えられます。3点ありますが、そのうちの1点には2か所に同じ字が書かれています。

・「廣君」
坏の底部外面に書かれ、これも人名をあらわすものでしょう。

・「蔺田」
坏の底部外面に書かれ、アザミタと読むものと思われ、地名を指すものでしょう。『諸橋大漢和辞典』にはアザミと読む字として「薊」だけしか掲載されていませんが、「日本書記」の垂仁15年の条に「蔺瓊入媛」（アザミニイリヒメ）の例があり、「旧事本紀」「日本紀略」の垂仁15年の条も蔺の字を使っています。また、「新撰字鏡」も蔺をアザミと訓じています。「類聚和名抄」（八）草部に蔺、蔺、蔺、蔺、蔺は薊の俗体と注しています。したがって、蔺はアザミと読んで良いと考えられるのです。発掘調査地点の現地名が莇生田（アゾウダ）と呼ばれることは、この墨書の蔺田から転じた地名であるかも知れません。

墨書土器は、現在県内の43遺跡から400点以上発見され、年代的には8世紀後半から9世紀前半に集中しています。しかし、その性格についてはあまりよくわかっていません。それは、大部分が漢字一字で意味不明のものか、あるいはさまざまな解釈が可能な字句によって占められているからです。今のところ、容器の管理記号といった事務的な意義を与えようとする見方と、吉祥句的なものが多いことを重視し、祭祀で使用する際に書かれたとする見方に大きく分かれています。したがって、字句の解釈はもちろんのこと、遺跡ごとの字句の組成や、記入位置、器種の整理、それと土器の生産、使用、廃棄のどの過程で墨書されたのか、あるいはどのように使用され廃棄されたのかを明確にしなければ、その性格は解明されません。

ともあれ墨書土器は、文字を読み書きできる人びとの存在を裏付け、文字文化の浸透度を測る一つの指標となり、ひいては、その遺跡の性格をも規定する重要な役割をもっているのです。

墨書土器「秦」

墨書土器「長」

墨書土器「蔺田」

【回顧】春季特別展（1996.4.25〜6.23）

夢楽洞万司の世界

笠松　雅弘

会場アンケートの紹介［部分抜粋］

たいへん多くの感想をいただきました。また今後の企画の参考にしたいと思います。

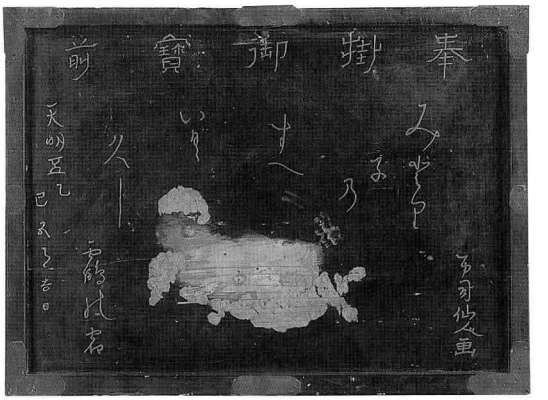
◆はじめてこの人のことを知り、福井の文化に感動しました。（50代女子）
◆福井県で昔こんなことが流行っていたとは知らなかった。（10代男子）
◆近くの神社にこんなに立派な絵があったなんて、とても驚きました。（30代女子）
◆万司を見て、あらためて福井を見直した気分です。（30代女子）
◆生活の中からこのような文化が育成されたことを知り、良い企画でした。（50代女子）
◆我がふる里の絵馬がありました。かくれた先人の業績をみてうれしく思いました。（70歳以上男子）
◆夢楽洞が庶民の願望に根づく、生き生きした独得の筆致で絵馬、天神画に夢を託した事、郷土の誇りに思う。（70歳以上男子）
◆地元ならではの天神画が一堂に集められ、素人でも本物を見比べることができて、大いに楽しめました。（30代男子）
◆家にもよく似た天神様があり、ルーツがわかった気がします。（10代女子）
◆父の天神様が福井の絵師によって描かれたものである事を知り、より親しみを覚えた。（50代女子）
◆万司天神を空襲で燃やしてしまったので、とても懐かしかった。（70代男子）
◆復元の背景や墨の落ちた奉納額の読み取り方等、裏方の作業をも知ることができて、おもしろかった。（20代男子）
◆復元などの作業が美しくて驚いた。（10代女子）
◆江戸後期の庶民と神社の関わりをもっと知りたいと思いました。（20代女子）
◆江戸時代の旅との関連をもう少しつっ込んでほしい。（40代男子）
◆今後さらに浮世絵（販売）についても調べてほしいと思う。（30代男子）
◆今後、雑俳の調査と展示を希望します。（40代男子）
◆今後も福井の埋もれた文化を発掘し、県民に示していただきたい。（30代男子）
◆常設展にして福井へ観光に来た人に見てもらうのも大切です。（60代男子）
◆将来、福井市内に夢楽洞の復元記念館を作ってほしい。（60代男子）

資料紹介
会期中の発掘

特別展の会期中、鯖江市下新庄町の三田村さんからご紹介いただいた漆塗りの絵馬です。同町の薬師堂に天明五年（1785）五月に奉納されたものです。

画中に「万司仙人画」とあり、夢楽洞の初代万司が絵と文字の下書を行ったことがわかります。万司の下書をもとに、漆職人が仕上げた作品と思われます。こうした漆塗りの絵馬は県内でも他に例がありません。きわめて貴重な遺品といえます。ただ、絵柄の詳細が判明しない点が少し残念です。貼り付けてあったものが剥落してしまったのでしょう。白く見える部分が糊付けの跡と思われます。

あえて推測すると、手足の形（構図）が少し残って見えることから、はい歩く幼児（緑児）の姿を描いたもののように思われます。子供の成長を祝う特注品の絵馬であったのかも知れません。この作品も夢楽洞で受注製作したものでしょうか。



表書：「奉掛御宝前／みとり子の　すへいく久し　鶴の宿／天明五年乙巳五月吉日／万司仙人画」
裏書：「諸願成就／新村／福岡氏」
法量：45×60.5㎝

活動紹介

博物館実習

中原　義史

博物館では福井県の自然や歴史・民俗についての展示を常時行うほか、特定のテーマに沿った企画展を毎年開催しています。また、講演会・教室・見学会・学習会などの教育普及活動も随時行っています。ただし、このような活動には、その基礎として普段から資料を収集したり、それについて調査・研究を行うというような地味な活動が欠かせません。このような博物館の専門的な仕事にたずさわる職員を学芸員と呼びます。

学芸員になるためには、まず学芸員資格を取得する必要があります。これには国家試験を受験し資格認定を受ける方法もありますが、現在大半の者は大学で必要課目を受講して資格を得ています。その際、講義の他に博物館の業務に関する実習を受けなければなりません。福井県立博物館でも、毎年数名の実習生を受け入れています。

今年も8月6日から11日まで博物館実習を行いました。その内容は、自然・考古・歴史・民俗など各分野の資料の意味や取り扱い方を学ぶというものでした。講義も織りまぜながら、土器や古文書・民具の整理方法について実習しました。また、勝山市北谷で行われていた恐竜化石発掘調査にも参加しました。

今回の実習を受けた感想を紹介しますと、

- 博物館というと、主に展示しているだけの場所というイメージがありました。でも今回の実習で、学芸員が博物館内外での調査・研究などで、想像以上に積極的な活動をしていることがわかった。
- 学芸員というと展示についての質問を受けたり、説明したりすることが主な仕事だと思っていた。実習に参加して地道で大変な作業が多いということが分かった。でも、それが見学者にあまり知られていないことが残念だと思う。

このように、実習を通して博物館や学芸員のさまざまな活動に気づいた実習生が多かったようです。しかしこれは逆に、「学芸員＝展示・解説職員」というような認識が社会全般にある表れではないでしょうか。また、たった6日間の実習でことたれりとする、現在の学芸員養成制度にも問題があると思われます。さらに、学生の間に資格取得のみを目的とする風潮があることも否定できません。

学芸員に課せられた高い目標に対して、社会全般の評価は低いといわざるをえません。今回の実習生の中から、私たちを叱咤するような優秀な学芸員が現れてくれればうれしいのですが・・・。

古文書の整理

古文書の整理

民具の整理

解説

復元夢楽洞絵馬「大織冠(海士)図」

この図柄は、代々の夢楽洞の絵師が得意とした絵馬の画題の一つです。江戸の安永期(1772～81年)から明治初年(1868)にかけて、県内に複数の作品が残されています。当絵馬は、清水町在田の熊野神社に奉納されたものです。使用された顔料や筆致などから、嘉永期(1848～54)の作と思われます。

画題は、唐から送られた宝珠を竜神に奪われた大織冠(藤原鎌足)が、海女の力を借りて竜宮から宝珠を取り返した場面を描くという意で「大織冠図」と名付けました。これは、幸若舞曲や浄瑠璃・歌舞伎の演題「大織冠」から命名したものです。ちなみに、大織冠とは古代の最高冠位で、初めて鎌足に授けられたことから、鎌足の別称として通用したといわれます。

これによく似た物語として、謡曲にも同じような玉取り型の説話を骨子とする「海士(海人)」の曲目があります。古作の能の一つと考えられるようですが、ここでは大織冠・鎌足は登場しません。夢楽洞の絵師は、何に基づいてこの場面を描いていたのでしょう。「大織冠図」「海士図」あるいは「竜宮玉取り図」のいずれの名が適切なのでしょうか。このことは、今後さらに検討を加えるべき問題です。

○

絵馬の復元作業は、福井市在住デザイナー、島村正博さん(40歳)が行いました。実物と板目のよく似た杉板を選んで接合し、まずは薄い胡粉(白)を全面に塗って板面の目つぶしを行います。そうすると、彩色の際の'にじみ'をよく防ぐことができるのです。その後、夢楽洞が多用した「泥絵具」と呼ばれる顔料に属する水干(すいひ)絵具をベースに彩色を重ねていきました。彩色の工程も、かつての手法を復元するように、墨で下絵を描いた後に順追って一色ずつ彩色することを原則にしました。この方法が、顔料の調合や筆の水洗処理などの面でもっとも合理的なやり方で、分業を可能にする手段であったとも思われます。

○

復元の過程で困難をきわめたのは、海の彩色でした。海の上部は胡粉(白)で波線を描いた後に薄い藍(青)を補色し、下部は薄い藍をベースに塗った上に胡粉で波線を引いていることが判明しました。つまり、海の上部と下部で描き方を変えていたのです。また、その際、薄い藍色の顔料が何かということが問題となりました。今のところ、胡粉を媒体に半透明な染料のような顔料を使ったのではないかと推測されますが、この点はさらに検討を要する課題の一つです。また、金色も二種類の顔料を使用したようで、後で塗り忘れを補ったのか、金色を塗るべきところに一部黄土(黄色)で彩色した箇所のあることも分かりました。

このような復元作業を進めていくと、眺めているだけでは気づかない、細かな手法の痕跡が見えてきます。今後、こうした確認作業をたくさん積み重ね、工芸技術の上での夢楽洞の解明をより実証的に行っていきたいと思います。

(笠松)

ふくいミュージアム

No.30
1996.11.30発行

編集発行 福井県立博物館
〒910 福井市大宮2丁目19-15
☎0776-22-4675(代)
デザイン 有限会社シー・エス・ケー